

アイコンタクトもとれる。俳句もやっている。教科で子供一人一人の感性を磨くこともやっている。総合だけでなく、子供一人一人を浮き出させていくことをやっている。

一人一人の子供を見ていこうということを続けていきたいと思っている。(総合学習について短歌でつづる総合学習の紹介あり)

中村：司会者も何か言えと的場先生に言われたので。5年前はフロアにいた。将来計画委員会に参加した。お年寄りの時代でなく、若者の時代。(当時、話を聞いて) メモを書いたものは忘れた。感覚だけが残っている。聞いた感覚は残っている。今聞いた感覚を大切にしたい。

## 高校シンポジウム

### 「総合学習の在り方をめぐって」

コーディネーター；植田健男

(名古屋大学教育学部助教授)

提案校；「生徒の興味関心と総合学習の成立」

池上東湖先生 (大東学園高等学校)

「『産業社会と人間』と総合学習」

服部次郎先生 (筑波大学附属坂戸高等学校)

「総合学習と進路指導の関係」

矢木修(名古屋大学教育学部附属中・高等学校)

司会；斉藤眞子

(名古屋大学教育学部附属中・高等学校)

斉藤：午後の高等学校シンポジウム「総合学習の在り方をめぐって」をはじめさせていただきます。はじめにコーディネーターの植田健夫先生をご紹介します。次に提案校3校の先生方を紹介いたします。まず最初に大東学園高等学校池上東湖先生です。次に筑波大学附属坂戸高等学校服部次郎先生です。三人目は本学名古屋大学教育学部附属中・高等学校矢木修でございます。だいまからシンポジウムを始めるにあたりまして、各提案校の先生方に総合学習にどのように取り組まれているか、概要を発表していただきますので、だいたい1校20分程度を予定しております。よろしくお願いいたします。それで、始めるにあたりまして先生方のお手元に質問用紙というものをお配りしてございます。各発表校の内容についてご質問等があれば、後半のディスカッションの所で先生方に答えていただきたいと思います。また、総合学習の在り方をめぐってということでありますので、先生方がお考えになっているテーマについて、今回のシンポジウムで取り上げる事ができると思います。そのようなご意見をお書き願いたいと思います。で、3人の先生方

の発表の後にコーディネーターの植田健夫先生からのご提案がございます。だいたい1時間少しを目安にしておりますけれども、そのあと10分ほど休憩を取りますので、その時にまでにお書きいただいて、私、司会の所までお寄せください。その中から何点かを後半のディスカッションテーマとして取り上げていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。最初に大東学園高等学校池上東湖先生より御願いたします。

池上：大東学園高等学校の池上と申します。袋の中にレジメを入れておきましたのでそれを見ながら聞いていただけたらと思います。あの、私たちの学校は、東京の世田谷にある私立の女子校なんです。うちの学校は、その部分見ていただければ分かると思いますが、少し歴史的な経過がありまして、いわゆる、今はもう偏差値が無くなったんですけれども偏差値がある時代はですね、東京の私学が240校ぐらいあるんですけども、そのピリッケットに位置した学校なんです。私は数学を教えているんですけども、一時生徒が多い10年ぐらい前ですね、600名ぐらい入ってくる生徒の350人ぐらいが数学が1の生徒がいたんですね。ある福島の私学の先生に聞いたたらこれは福島全体の数学の1の数ですよと言われことがあるんですが、そうゆう中でやってきました。それで今はですね、偏差値が表面上はなくなったものですから、少し教師も生徒も明るくなっている学校なんです。私たちの学校は、経過のことは後で話しますが、96年から学校完全5日制にしました。それに伴ってカリキュラムも変えて総合という授業を入れました。その総合は、私たちの定義ではですね、こういうもの、資料の3頁にありますけれども、「一つの教科では追求しきれない社会や生活に関わる現代的テーマを調査・研究・発表・討論などの様々な方法も取り入れて学習していくもの、推進は幾つかの教科がチームを作って進める。」こういうような定義で始めまして、あの、各学年1単位でですね。1年生では『性と生』というテーマで。2年生では「平和」これは11月に沖縄に修学旅行へ行くものですから、その事前事後をかねてですね。それから3年で「女性と人権」というテーマでやっています。これで、96年からしましたから、ちょうど今年で4年目を迎えているところですよ。それで私たちが何故この総合・総合はですね。テストをしない。それから評定を付けないと言うことで始めています。じゃー単位はどうするかということですけども、単位は認定か認定しないかということで、これは出席点と後は各教科いろいろな形があるんですけども発表を1年の終わりにはして、それで終わりにするといゆ形にしています。その発表の

仕方「性と生」なんかでは、グループ発表でやったりするんですけども、2年生の平和なんかは、クラスで劇仕立てにして3年生の送る会でやって、発表に代えとかですね、様々な形を取っています。それで何故うちの学校そういうのをいれたかっていうことなんです。93年・全体が学校5日制が週1になり、週1が学年の途中で入ってきたんですね、公立の場合。それから週2が入ってきて私たち私学の方も、まあ、公立が入ってきたんでそれに準じてやっていたんですけども。その当時の雰囲気という、95年までには完全5日制になるんじゃないかと、これは、週40時間の労働制の問題を中心にそのころは話されていまして、なるんじゃないかということ。うちの校長が「後追いばっかじゃ杓に障るから、今回は事前に準備使用や」ということで提案があって。93年そういつても、これは大変だと。校長が言ったものを私たち方は、大変だなという感じがあってですね。93年の秋に、そういつても、カリキュラムの問題が一番大切だろうと言うことで、カリキュラムの検討委員会：私たちの名前では教育計画委員会と言うんですけど、これを一応教員の中から公募して11名で発足させたんですね。校長が呼びかけて応じたという形なんですけども。それで、その中で、その前にあの、私たちの学校私学なんですけども。91年に大きく学校の体制が変わって、わりと風通しのいい学校になったということもあるんですが。その中であの、カリキュラムそのものを見直してみたいという動機もありまして、93年に発足いたしました。この中でずっと論議していったんですけども、結構、当時は何ですかね半年ちょっとの間に会議が保証されているわけではないですから、放課後とか夜に、その11人のメンバーで37回ぐらい会議をやりました。

この中で、大きな心構えがあるから、戦後の文部省のいろんな資料だとか、民間の資料だとかを当たりながらですね、どんなものをつくるか論議していこうと、大きな志で始めたんですけども。子供たちの所で自分たちの教科・カリキュラムはどうかといとですね、今まではそういう、低学力の子が来るものですから、どっちかという細かく面倒見て、数学なんかで言えば、プラスマイナスの計算がはつきりしないと言うのが圧倒的なんですけども、分数にさかのぼることもあるんですけど。細かく数学をやっていこう。それには時間数も、数学国語英語など割りに多い単位数でやってきたんですね。だけれどもそれをずーとやってきてもあんまり子供たちの方は、それで少し分かるようになって、でも、週に5時間も6時間も英語があったりすると、やっぱりいやだというのは目に見えていて、子供たちの方はこのカリキュラムじゃなくてもっ

となんか欲しいということで、これはアンケートとも一致したんですね。教師の方はどうかというと、はなして、11人の中で話した中でも、やっぱり、最初はなかなかでなかったんだけど、ほんというところある先生が「10何年教師やってるんだけど、満足した授業は今まで1回もないよ」と言うんです。1回もないのって、まてよおまえ、10年もやっていてそんなのないのかなと言う意見もあったんですが。それは割に本音で、みんなも結構・私なんか数学で、教材研究してこれだっと思うと、行ってもすれ違っちゃって、むなしいま帰ってくるとか。ですね、と言うことが繰り返して。これは教師にとってもこのままでいいのかというものもあって、そういう中から少し違ったものを考えていくことも必要じゃないかということ論議してきて、その中で、私たちの学校でヒントになったのは、いつもその2月に3年生を送る会やるんですが、その時に在校生がですね、3年生にアンケートを取って、教師の人気投票をやるんですね。その何年かまえごろまでは、若い男性教員なんていうのは、独身先生なんて言うのは圧倒的人気があったりしたんですけども、その論議をしている年に変わったんです。その男性の教員は都立高校を定年で流れて講師で来ていて、持ち時間の数も少ない先生なんですけど、その先生がトップになった。それはどうしてなのかと聞いてみると、その先生は国語の先生で、うちの生徒は字が読めないわけですから、教材は、みんなに読んでもらうために主教材から副教材まで全部ルビを振って、いっぱい読ませたんですね。その先生は、読んで生徒が感想書いたら、これを教科通信で毎回返した。これをずーと繰り返している先生なんです。この先生がトップだったんです。女の先生は、うちの学校の卒業生の社会科の若い教員で専任になって2年目くらいの先生がトップになったんです。この先生は何かというと、教え子なんですけども、いつも走っているんです。社会科の教員なんですけども、資料にあたってよくわからないところがあると、いまだに僕も教えた教師ですから「先生ちょっと聞いていいか」というんです。それくらい専門のことだから自分で考えればいいと思うんですが、そんなような形でやっている教師なんですけども、この教師がちょうど現代社会をその3年生で受け持っていますね、ちょうど薬害エイズの問題なんかあったときなんですけども、この教師が結構体当たりで当たっていった。たとえば薬害エイズの問題で、どの新聞も書きますが、普通の教師は生徒に与える新聞は配慮して、朝日新聞じゃないといけなとか、小さい記事を与えたりする。だけれどその教師は、いろんな所をあたってあるでっかく取材した記事を生徒に与えた。それを見て、他の教師はあんな新聞生徒に渡

していいのかとかあったんだけど、子供達の方はその新聞を見たら非常にリアルに竜平君がいろいろしゃべっているのを見たりして。そこで動き出してあるクラスで竜平君に少し話を聞きたいという生徒が出てきた。他の教師だと無理だと断るのを、「電話番号聞いてあげるから、あなたたち電話しなさい。」と対応した。そしたら、その子が電話すると、たまたま竜平君はいなかったんですけど、当時薬害エイズの問題を広げたいという学生の支援する会があって、そこで東大の学生が話に来てくれることを承諾してくれた。この東大の学生がHRで50分の話をしてもらう予定だったが、1時間半しゃべりまくったが、だけど普通の授業で教師が五分10分しゃべると、もうやめたらどうかという顔をするが、この時ばかりはずっと熱心に聞いていた。その子たちは、その後で学生の方は何とか運動を広げたいという気持ちもあって。みなさんも参加してほしいという、渋谷で行進に参加した。いった子供達は、秋の文化祭で1年生3クラスともエイズの問題、薬害エイズ問題を取り上げる中心となっていった。1つのクラスは、厚生省に取材に行った。しかし、いったら門前払いで、ノーコメント。生徒はそれでも引き下がらないで、厚生省の下の食堂によって取材した。他のクラスは、薬害エイズが走りだったので、医者との関係者らに訪ねていった。その取材内容は、展示され、薬害エイズの弁護団が見て、薬害エイズを追求するきっかけとなった。このときの文化祭は1年生の3クラスが非常に光っていた。このような経験もあって、この教師がトップであった。

そのようなことがあって、否定的にしか見なかったけど、ひかっている実践もあって、そういうところにもヒントがあるのではないかということでもとめてきました。途中経過は文書に書いてありますけども、今までの子供達のニーズにあった授業をひとつ作らなければならないということでひとは総合に結びついた。そのテーマを決めるところは、1年生の性と生は、女子高でもあるので性に対して硬い意見の先生も一致した。1年生で少なくとも、私たちは後追いの指導をやっているものですから、夏休み前までには、きちんとした性知識を持たせた方がいいと性の問題に固まった。2年生では、当時は九州でしたが5日制の実施から沖縄に変更した。今までも事前の準備は放課後にやってきた。その準備を授業中にできることで合意を得ることができた。3年生の女性と人権というのは、テーマが漠然としてはいるが、就職後の子供達の問題や生活の問題をもつ場合が多いので、社会に出る前に一定の準備をするためにこのテーマが決まりました。

この事業をやってこの資料の最後に、去年の3月の卒業生の一つのクラスの総合を終わった感想を載せて

いますが、3つの総合ともよかったというものはなかったが、どの総合も嫌だ、だめだというものはほとんどなかった。そのなかで共通していたものは、自由に自分たちが発言できたということが共通してあって、そしてわりとまじめなテーマでみんなが話をするので、人がどんなことを考えているのかがわかった。この二つが共通して出ていた。以上のような感想が寄せられていました。時間なので第1回目の内容はここまでとさせていただきます。

服部；筑波大坂戸高校の服部でございます。池上先生とはだいぶ違ったところから本校の実践を発表させていただきます。私ども筑波大学附属というわけですが、このあたりの先生では誤解もあると思うので、はじめに説明しておきますが。筑波大学の附属高校は3つありまして東京に2つあります。何もついてない附属高校と駒場高校というのがあります。これは普通化の高等学校であります、私どもの坂戸高校は埼玉県にございます。埼玉県の真中に坂戸市と言う地方都市がありそこにある高等学校です。そこは、50年ぐらい経つのですが、農業科・機械科・家政科・生活科という職業学科の高等学校です。国立の附属としては極めて珍しい、全国にも愛媛大学の農学部の附属、東京工業大学の附属と、東京芸術大学の音楽高校とこういう、これと坂戸高校がいわゆる職業教育というか職業課程の、専門学科の附属というところなんです。まず普通科高校ではない、本校は、農業工業家庭商業という職業教育の附属学校だということです。それが昭和の終わりぐらいに、公立の専門学科と同じように、学校として低迷していきまして、学校改革を図っているときに、文部省のいわゆる総合学科という新しい学校制度が提唱されまして、やるのなら初年度校でやろうということになりまして、平成6年度に全国7校の一つとして、初年度総合学科を始めたという経緯です。専門学科が立ち行かなくなってきた、総合学科に改変することで今6年目なんですけど、総合学科として、今日は本題ではないのでそっちの話はなるべくしないようにするんですけど、総合学科の諸課題に取り組んで学校立て直した、専門学科として立ち行かなくなってきた総合学科にすることで学校の活性化を図ったというそういうモデルとして全国に紹介されていまして。そっちの方で最近注目されている学校です。そのなかで、総合学科を作っていく学校作りの中で、総合学科の原則履修科目といいまして、産業社会と人間という科目が置かれたわけですね。それで、平成6年度総合学科を始めて行く時に学校全体で取り組んだ、産業社会と人間という科目が今日課題となっています総合的な学習の時間の学習活動の先駆けになるものではないかということで紹介され

ている。今日お呼びをいただいたのもそういう面です。すね、産業社会と人間というものが総合的な学習の時間の一つの先例になっているという観点からお招きいただいたということで、本校の産業社会と人間の実践を紹介いたします。お手元にプリントがございます、そのプリントの1ページにその辺の総合学科に取り組んで、その中で産業社会と人間というのが開発されて行ったということを述べています。もう少し総合学科のことを説明しないといけない感じがしますので、総合学科の根幹は選択制と単位制の教育課程編成ということで、生徒に個性や進路に合わせた時間割を作らせて主体的に学習の取り組みさせるというのが総合学科のねらいなのですが、後ろの方の資料をごらんください。7ページ8ページというところに、まず7ページに教育課程表・表になっております。上の方にあるのがいわゆる必修科目でございまして、真中から点線で囲ってある部分が総合選択科目群あるいわ自由選択科目群といってこれが選択科目です。生物資源系列とか、エコロジー系列など系列でくくってありますが、これは生徒に示す学習のめあすというものです。生徒の選択の対象というものは、系列を選択するものではありません。科目すべてが選択の対象となっていて、数にして100近くの選択科目がございます。この中から生徒は、自分の進路や将来の生き方あり方に応じた時間割を作っていくというのが総合学科です。実際にどういう運営をしているのかというと、8ページのクラス別の時間割表でして、1年次はほとんど必修科目ではいっております。2年次になると、半分ぐらいが選択科目の時間帯になっていきます。3年次になりますとほとんどが、月曜の1時限のロングホームルームと2時間目が保健の時間で、ホームルームで学習するのはこの2時間だけです、1週間のうちで。後は全部分かれて選択科目の学習になっていく。選択科目という時間帯にどういう時間が組まれているかというのが、9ページの選択科目時間割表というものです。例えば、月曜の5・6時間目は調理2からオーラルコミュニケーションbというので、14科目設定されております。生徒はこの中から2年生で何を選択し、3年生で何を選択するのかになっています。ですから当然、例えば月曜の5・6時間目には家庭科系の科目を選択していながら、火曜日には工業を選択したり、水曜日には農業を選択したりとそういうようなことも可能な選択です。つまり、予め定められている選択の仕方というのは、ないわけです。

そうしますと、総合学科の一つの課題としては、選択の指導をどうするかということが大きな課題になってきます。ある意味で生徒は単にこの科目は面白そうだから、あるいは先輩がこの科目の先生は自習が多いと

いったからだとか、われわれが大学のときにそう言ったことがありましたけど。安易に流れる選択になってしまう面をどうするか。ということが総合学科では、入りの課題となっている。そこでしっかりとした進路指導をした人間としての生き方あり方に及ぶような指導をして、主体的な学習に取り組めるような主体的な科目選択ができるようなそういう指導を入学当初からしていかなければならないという課題が出てまいります。そこで置かれたのが、この産業社会と人間という、総合学科では原則履修科目・入りの科目・ガイダンス科目とっておりますが。これはですねある程度文部省が指導資料を作って方向性なんかを示したわけですが。その内容については、

それぞれの学校が科目開発すると、言うことで始まりました。そこで、本校ではどういう産業社会と人間の内容を作ったかと言うことでありますが。2ページから見ていただくと本校では大きな流れを、自己を見つめる、職業を理解する、本校における履修計画を作る、そしてライフプランを作るとこういう4項目で大きな項目を設定いたしました。はじめの自己を見つめるというところでは、最初は、職業レディネステストだとかいわゆる自己理解のテストを中心に組みました。この中で、指導計画表を見ていただくと、4月30日のところに、体験学習；菜園を作ろうという、つまりこれはもともと本校は農業高校でしたから、一人一区画1m×2mの区画を160区画作りまして、そこに枝豆ととうもろこしを植えさせる。つまり作物を育てるということを経験させるということですが、そこには総合学科で強調しております、自己選択・自己管理・自己責任という、それを教える一つの教材とするということ。そういう話をしながら生徒と一緒に畑作りをするんですが、最初のうちは朝来て様子を見て草をむいたり、水をやったり、帰りにちょっとよって水をやったり、とかいう生徒はいるんですが、だんだん遠ざかって行かしまして、そのうちには草ぼうぼうになっていくんですが、でも中には、7月の夏休みに入る前に収穫をするんですが、きれいに管理する子も少しはいます。だんだんそういう子は増えていっているところもありまして、そういうところから入っていきます。その次のところに、ボランティア精神を学ぶ、これは、地元の社会福祉協議会などのご協力をいただいて、盲の方とか車椅子の方とかに来てもらって、そういう障害者の生活について話してもらおう。あるいは、そういう方達が、どういうことを健常者の方に期待しているかなども話してもらって、生徒にこういうことをまず、アイマスクなんかで階段を降りるとか、盲の方をどうやってガイドしたら良いかなども実際体験させます。それから進路指導に入ってまいりまして、それで11

ページの方をめぐっていただけますと、社会人講和というのがありましてここは地元の方に講師になっていただいて、最初の授業は、学校へ来てもらって仕事な話をしてもらおう。そして、その次のコマでは、その講師の職場に生徒のほうが出かけて行って、そして1日見学したり実習させてもらったりします。今年どういう人を頼んだかというのは、13ページに表にまとめてあります。本校160名の生徒ですので、一人に10名づつ付けるということで、16名を予定してこういう職場体験ということをやらせます。それから、本校における履修計画を作るところで、ここで、時間割づくり、本校の実習施設を全員にローテーションで体験させます。つまり農業の勉強をするというのはどういうことか、ということを農場で全員に体験させる。工業の勉強するということは工場で体験させる。そういう部分に入ってきます。それから、12ページに入りまして7月の9日、夏休みの前に2年ではこういう時間割を作り、3年ではこういう時間割を作りという。時間割づくりのノウハウを説明する時間があります。それで自分の時間割づくり・選択科目の時間割表でどういう組み合わせで2年の時間割を作り、3年の時間割を作るかということをやらせます。夏休みをはさんで夏休み明けに自分の時間割を作らせ、提出させる。こういう風に説明すると簡単ですが、このところが一番大事なことでありまた生徒は真剣に悩むところです。自分が進路や将来を見通して高校3年間をどう過ごしていくか、実際は2年・3年の2年間ですが、2年間でどお学習生活を組み立て、3年をどう組み立てるか。この、ここを悩ませるで、一度作ってしまう・途中の変更は可能であるというのが総合学科なんですが、実際のところはですね、施設設備に制約されますから、例えば40人用のコンピューター室にすでに45人希望者がいるということで、後から変更したいといっても、そういうところには入れない。20人の定員のところに5人しかいないというところには、後から変われますけど、だいたい変わりたいというのは、いわゆる人気科目、いっぱいいるところに変わりたいというもので、それは、途中から入れない。ですから、そういうことなんかわ生徒に十分説明していきますから、一度作ったら卒業までそれで行くんだよということで、生徒は真剣に悩んで時間割を作る。その中に学習の動機だけ、自分で選択した科目だから最後までやり遂げたいという決意が生まれていく面がある。それで、教師としても力を入れて指導する所になっていきます。その後はライフプラン；人生を考えるみたいな形で作文を書かせて、発表会をやる。発表会も、クラスの発表・学年の発表会それからお客を呼んで発表会、そういうようなかたちで最後まとめていくかこう

になります。内容はそういうような内容でして……。前に戻っていただきまして、4ページ実施の形態は、火曜の5/6限・金曜の5/6限に4クラス同時展開で組んでいる、授業担当者は、9名の異なる教科の教員によるチームティーチングで実施した。

1年のホームルーム担任がやる学校もあります。でも本校は、最初の内はあくまで教科科目なんだから教科科目の担当者として考えようと、HR担任は校務分掌で決める時期も違うし、これは分けて考えてきました。でも、最近では、どうしてもHR指導と重なる部分が多いので、1年の担任と産業社会と人間の担当者が一緒の方がいいと声も出てきていた。これは今後の改善点になっています。それから、評価と単位認定……。評価はですね。今この産業社会と人間は、いわゆる総合学科に特に置く、原則履修科目ですから。教科科目ですから評価もしております。ただそれはあまり評価というものに重きを置いていませんが、一応教科科目ですから。そこにあるような、ノート提出とか普段の取り組む態度意欲、そういうものを評価する観点で、一様最後は5段階評価をつける。でも、ほとんどは4くらいのところがついていて、特に活躍が顕著だったものを5にするとか、ちょっと欠席が多かった者とか、意欲が足らなかった者を3にする。実施後の生徒の感想は、非常に生徒は意欲的に取り組んで自分の進路を考えることができたというような感想が多くでています。最後に今言われています総合的な学習の時間との関係との関連で考えますと、総合的な学習の時間の学習活動という面では、1/2/3といわれています、この3の自己のあり方生き方や進路についての考察する学習活動。これに相当するだろうとおもわれます。今後本校としてこの産業社会と人間をどのようにしていくかというのは、これからも総合学科を続けていきますので、これは1年の時に置く入り口の科目；原則履修科目。それで本校としては、総合的な学習の時間というのは、これとは別に2年に今韓国へ校外学習へ行っておりますので、韓国をテーマにした学習活動の位置で言えば国際理解とか教科からの関わりなどを含めたものを置いて。3年では、今まで課題研究問いのをやってきておりますので、課題研究の名前を変えて3年におくと、この学習活動の2ですね。生徒が興味関心に応じて課題に取り組むというこの部分を総合的な学習の時間にしていく。今後はさらに深めていこうというふうに考えております。時間になりましたので一応これで終わります。

矢木；私に与えられた題というのは、総合学習と進路指導との関係ということですが、取りあえず20分しか時間がないのでまず私どもが行っておりま

す総合人間科のその概略をお話しして、時間があれば・・特に私の方はレジメ用意しておりませんので、今日の要項それを見ながら説明させていただきたいと思っています。

私たちの今取り組んでいる総合人間科というのは、実際には平成7年度からですが、もっと以前からも二十数年前から・・・一応私たちは教員の中で研究グループをつくっておりまして、その一部の先生、特にこういうのに関心ある先生、倫社の先生だとか生物・保健、技術科の先生なんか、研究グループで公害問題だとか生命倫理だとかそういう問題を扱った形での総合学習に取り組んでいました。ただしこれが、必ずしも全校的に諸手をあげて大賛成というわけではなかったかと思います。細々と認知されながら続けてきたという、多少批判的なというか、そういう先生方も中にはいました。ですけれども実際取り組んできたのの大きな理由の一つには、学校づくりというのでしょうか、私たち国立附属ここ数年来附属の存廃論というか、附属の存在意義というのが問われていまして、私たちが何かやらなければいけないと。そして、生徒層も20数年前から比べると、若干レベルもダウンしてきた現状をふまえ、少しでもボトムアップというかそういうことを考えたいと、・・・どうしたらいいだろうか。附属一つの指名としては研究だというようなことで、・・・じゃーどうしようか。ということで学校づくりの一つとして何かしようと、そこで、今問題となっている現代的な課題、そういうものを一つのテーマとしてみんなでこれに取り組んでいこうと言うような形からこの総合学習が発案していきました。いわゆる教科の中から、・・・一部の先生には、教科の中から必要性を感じてスタートしてきたというのもありますけれど、大多数の教員の中には何とか今、私たちの学校を何とかしなければいけないと、そういう中からストーとしてきたと言ってもいいかと思います。

平成7年度に研究開発に応募しまして、この時は高等学校の方でレジメで言いますと5番目に当たるところですけれども、「高等学校における学習の遅れがちな生徒に対する教育課程の開発」というテーマで取り組みました。この学習の遅れがちな生徒というのは、私自身も最初の内は、ただ単にいわゆる本当に教科の遅れという者でとらえていましたが、でも、よく考えてみると、実際に生徒がある偏差知的に言えば、かなり程度の高い生徒でも、将来どうするのか、具体的に大学を決めるにもどの大学、どの学部どう言うところへ行ったらいいかよくわからない。もっと先に、将来あなたは何になりたいんだと言ってもよくわからない。いまわからないけど大学入ってから決めるんだという、ような、自分の人生を自覚的に選択できないそう

いう生徒が多かったわけです。と言うことで、学習の遅れがちな生徒のとらえ直しからスタートしました。そこに3つほどあげてありますけれども、学校離れを起こしているだとか、人間関係の希薄さ、といものがある。自分の人生を自覚的に選択できない自信がもてない、そういうようなことで、そういうような生徒に対して、自覚的に選択できていくよな、そういう力を育てるための教育課程の開発をしようということで、私たちの所は中学も併設しておりますので、中学・・・中1入って、高3でるまでに6年ないしは、高校から一クラス分入ってきますので、高校から入ってきた生徒に対しては3年間でこのような力を少しでも付けたいと言うことで、取り組んできました。それで、学校づくりの一環と言うことで、これに取り組むためには一部の関心ある先生だけが取り組んでいたんでは、学校づくりにはならないだろうと。ですから、全教員で全教員で取り組む必要があるというようなことで、私たちは、全教員で取り組むことにしました。その取り組み方としては、その特徴として、3つの脱を、考えてきました。

その3つの脱というのは、1つは脱学校。鎖国状態である学校から生徒も教師もとびだそうと。2つ目は脱教科。教師の狭い専門性を脱ぎ捨てて、学びの意義の発見につながるような開かれた教科を作り出そうと。いうことで。といっても、ここでいう脱教科というのは、いわゆる数学や国語とかそういう意味での脱教科として扱っていただければと思います。もう一つは脱偏差値。旧態依然たる生徒の生徒感。と言うか生徒間同士の生徒感そういうのを打破しようと。教師も生徒も同じ土俵で学び合うことで新たな発見価値を見出すことができるように、そういう取り組みをしたいということで、3つの脱を全教員でと取り組もうと、テーマとしては現代的課題（平和・環境・生命・福祉・国際理解・情報）を扱うわけですが、全教員で取り組むと言うことで基本としては学年団で取り組もう、中学は各学年2クラスですので4名、高校の方は3クラスですので6名の教員で、この中には養護も入っています。いわゆる管理職も学校長以外学年に入って取り組んでいます。今日も公開授業でご覧になっていたと思いますが、高1では生命と環境。高2では平和を学ぶ。高3では生き方を探る。ちなみに中1では総合人間科の入門という形で、生き方を探る。私たちのこの総合人間科というのは、基本的には生きる力を育てるいわゆる人間の生き方というものをキーワードにしているものですから、その入門と言うことで、中1で生き方を探る。中2では、生命環境 part 1 になります。中3は平和国際理解派 part 1。で高校で高1で生命と環境 part 2。高2で国際

理解と平和 part 2。高3では最後の自分の進路を決めていくと言うことで生き方を探る part 2。そのように学年テーマを決めております。1年間の流れとしては、要項の学年ごとのスケジュールのまとめがありますので参考にしてください。生きる力を育てるためには、課題の設定力、解決力、表現力。最終的には自己実現と言うことで自己理解し自分の進路を決めていく、そのような形にして、それぞれの総合人間科の授業では、高1では、個人テーマを設定する。大きなテーマはありますが、生命環境という大きな学年テーマがありますが、その中で個人テーマをいろいろ設定していくが、設定した時に、大テーマに合わないからテーマを再設定させることはしていません。この教科のキーワードが生き方なので、それが中心となります。たとえば、生命と環境というテーマで、犯罪心理について調べたいというものでできます。動物や音楽について調べたいというようなこともできますが、祖 r w も取り上げたり、最終的には個人テーマを決定してそれをどういう過程で決定したのか、問いのを発表し、またその批評などをお互いにしながら、他の人の意見も聞きながら最終的に自分のテーマを決めていく、自分の進路に繋げていく。できるだけ扱いやすいように。なるべく個人に応じた形でテーマを設定させていきます。評価についても先ほど服部先生からの話でございましたけれど、私たちの所でも評価をいちおうしていますけれども、大きく分ければ、いわゆる自己評価、相互評価・教師評価・あるいわフィールドワークに出かけていったときに、相手の人から評価をもらったりだとか。その観点としては、4つの観点；知的関心の形成と問題解決能力・体験コミュニケーション能力・創造的表現力・総合的思考力と実践能力、その4つの観点で評価をしています。私どもは学年で取り組む総合人間科は、ABCでつけますけれど、よほどのことがない限りCはつかないということをやっております。他にも選択の総合人間科高2高3でやっており、それは他の選択の教科との関係で多少評価の仕方も違います。進路指導という観点でいけば、とくに、大学生などの変化、この辺はコーディネーターの植田先生の方が実際大学の先生でありますから今の現状の学生がどんな状況にあるか、よくわかりでありますけれども。学力の低下、学習意欲の低下が叫ばれておりますけれども、それは、今の高校生の学習の仕方が、どちらかと言えば大学にはいるための勉強。いわゆる、知識詰め込み型と言うことで受け身的な学習の仕方をしていて、その結果ではないかと受け取っています。それに対しての大学の方の学習の仕方、研究の仕方というのは能動的な学習研究の進め方それが要求されるということです。受け身的な学習

をしてきている生徒が入ってきたときにそのような問題が生じているのではないかと。大学の対応など、高校の関係者との連携を深める必要があることが話題となってきています。私たちに求められているという物は、大学に入るためだけと言うよりも、自分で自ら問題を見つけて解決していく、そういう生きる力を育てる学習の仕方であればいいのではないかと思います。この数年間私たちは実践してきましたが、けしていい評価ばかりでなく問題点も数多くあります。学習の遅れがちな生徒に対するということによって来ているけれども、実際に指導していきますと、やっぱり学習の遅れがちな生徒というのはこのような実践をやってもついてこれないとか、そういう生徒も現実にはおります。例えば、脱教室でメインに考えているフィールドワークで、過去にも例がございましたけれども、フィールドワーク先に自分でアポイントとって行くわけですけど、アポイントとった、ところがフィールドワークの当日、実際その訪問先へ行かなかったと、欠席してしまったと。その欠席したときに相手先に事情を連絡したかという、全く無断で連絡もしなかったという生徒もいました。そういうように問題になる生徒もなきにしもあらずですけど、・・・

選択総合人間科を合計20名選択していますけれども、その中で最後に、総合人間科のあなたに与えた影響、自分の進路決定にどう結びついたのかと言う作文を書かせました。その中でこんな感想も出ています。自分で調べることが身についていたので自分の進路をいろんな方面から調べることができた。とか、調べることから何もかも自分で選ぶと言う点で、自分でなんに興味あるかを真剣に考えられるようになった。高1で生命と環境に関するテーマ。高2では、平和の問題とか個人テーマを設定するということをやってきましたけれど、自分の進路を決める時に、高1で体験した、例えば介護のことを扱った。そうすると介護に非常に興味を持って実際に介護の方面に進みたいと言うことで進路決定したという子もいます。こんな生徒もいます「自分の可能性がどこまで通用するかを測る材料になった気がする。進路を考える際に今まで全く考えなかった職業なども自分にあてているようなことも思ったこともあったし、実際に進路を決める際に、わたしはこれだと。自信を持てるようになった。あとは、自信を持ってその職業に就き、自分にも自信を持って、その職業に就きたい。」という生徒もいます。それなりに、この選択をとっている子はどちらかと言ったら教科の成績が良くなって逃げの形でこの総合人間科をとってきた物が多いのですが、このような感想を書いておりました。現実には卒業生などを見てきますと、大学で自分たちがやってきたことはどうだ、と聞きます

と。同期の人たちが進学校から来た人が多く、大学での課題を提出するときに、その進学校から来た者は、何を調べてたらいいか、どう取り組んだらいいのかわかっている。そういう者を見るといっていいました。大学の入試に関して言いますと、国立の推薦で合格する者がここ数年若干増えてきていますがそれは、面接なんかで自分の考えとか自分の言葉で述べられるという生徒が増えてきました。その現れではないかと思っています。個人的には総合学習は学校づくりの1つだと考えています。公立の大規模な学校なんかは、困難な所があるかもしれませんが、自分たちの学校をどういう学校にするのか、そのためにそれぞれ教師たちがどう協力して連携をとってやっていくのか、そのあたりの所からスタートしないとまずいのではないかと思います。

斎藤；3校からの発表がございましたので、コーディネーターの植田先生方からこのシンポジウムに向けてどのようにディスカッションをしていったらいいのかがご提案をお願いします。

植田；名古屋大学の植田と申します。足元が非常に涼しいというかスースーする中で、かなり苦痛かと思いますが、後わずかですのがまんして聞いていただければと思います。

私は、教育経営学という分野を専門としています。教育内容とか方法をやっている人間とは少し違っています。そういう視点から問題提起をさせていただけたらと思っています。今総合的な学習の時間、学習指導要領や教科審答申で言われているのは、総合学習という言葉ではなくて【総合的な学習の時間】という言葉が使われているわけですが、高校では、まだもう少し切迫感がないのかもしれませんが、特に小学校を中心にして、全国でかなり動きがある状況になっているのではないかと思います。その際に目立っている状況は、一つは、教科学習を取るのか、総合を取るのかという二者択一の議論が目立っていると思います。というのは中学校で言いますと最大105時間取ることができる。どこから持っていくかといったら、もう学校週休二日制の時に行事を持っていってしまっていますから。教科学習の削減と結びつくことは、半ば避けがたい。今の学力状況で教科学習の時間をこれ以上減らしたら壊滅的なことになる。と、だからどんな理由であっても、こういうものは入れるべきではないという、非常に厳しい批判論があります。一方で今までの教科の学習が、非常に押し付け的なものであって、子供達の学び自身をつぶしてきた面があるのではないかと。新しい学習形態が芽生えるのであれば、

総合というものを良くわかんないけれど、そこに入っていったら学びの関係が変えられるのではないかと。こういう期待感でとらえる向きとですね、正面から対抗するような問題状況があるのではないかと。という風に思っています。この点については本当にこういう議論の仕方でのいいのかということが、最も実践的な問題ではないかと思っています。私はどちらを取るかという問題は、各学校が教育課程、これは教科課程ではなくてですね、あるいは教育課程表ではなくて。教科・教科外を通した教育活動の全体計画をちゃんと考える中で、各学校ごとに答えを出すべき問題だと思っていますので、一律にどちらが正解でどちらが間違いと申しあげるつもりはありませんけれど。少なくとも、先ほどのような立て方で議論していく限りは、時間の取り合いになる。もう一つはこの問題に取り組んでいるところも、授業作りの問題に埋没してしまっているのではないかと。つまり、あの4課題のうちのどれを取るのか、「環境」を取るのだったらどんな形で進めたらいいのか。教師の持つ時間はどうするのか。かなり、授業の枠内でどうするか、というところで考えている。あるいは、他所で何しているか見てみようという話で終わっているのではないかと。ある意味で、言葉は良くないかもしれませんが、授業作りの中に埋没しているという面があるのではないかと。一番大きな問題として、おそらく学校で問われているのは、教育課程の問題ではないかと思っています。その学校が子供達の状況をどんな風に捉えて、どういう共通のめあてを持って子どもたちの困難に向かっているのか。そういう、言わば学校の教育計画として教育課程を見直すということ。これは、教科課程の見直しも当然含まれていると思いますけれども、そういう展望がないところで、授業作りだけに踏み込んでいっても、結果としていい成果をあげることができないのではないかと。懸念を持ちながら、全国の状況を見ております。今回ご発表がありました3つの学校はそれぞれ、設置者も違いますし、あるいは学科も違うわけです。それから、学校が持っている基本的な条件も違っています。しかし、それぞれに、総合という視点を持って今の教育課程の問題、学校のあり方に取り組もうという点での共通項を持っているのではないかと。ここで、ご発表いただいた中身をもとに、どういう風に議論を組み立てていったらいいのかということを考えまして、4点の提起をしたいというふうに思っています。一つは多くの方がここを期待して来られたと思うんですが。各学校で行われている総合学習の中身、内容論自体の問題です。どういうテーマを選んで、そのテーマが生徒たちのどういう部分にかみ合っているのか、どういう運営の仕方をしているのか、総合学習の基本設計に関



わるような問題。それを各校相互にそれは違いますので、お互いの同一の視点と違っている点についてこの後深めることができればと思います。これが第1点目です。非常に短い20分間という報告でしていただきましたので、最後の部分がおそらく分からなかった面が多かったのではないかなと思うんです。話は逸れますが、司会の斎藤先生からありましたように、今いった問題についてもそうなんですけれども、是非質問意見あるいは、運営に関することも含めてですね、紙に書いていただければ、集約をこちらの方でしまして、各報告者の方に振り向けましてなるべくこういう点についてもお話してもらえようにしたいと思っております。

2つ目ですけれど、総合学習と総合的な学習の時間の違いという問題があるのではないかなと思います。これ自体を議論しようというのではなくて、私は結論的に言えば、今は、問題になっているのは教科の位置付けの問題ではないかという風に考えているわけですが、主として総合学習と呼ばれている枠組を学校の中に教育課程上に位置付けながら、取り組みを教科の学力形成、教科学習との連携をどんな風に意識しながら展開をしているかという問題が2つ目の論点として必要ではないかなと思っています。何故この、総合学習と総合的な学習の時間を分けるのかという話しになるわけですが、政策的に位置付けられている総合的な学習の時間というのは、教科学習をきっちり位置付けるという前提がやはり弱いと思うんです。言葉としては基礎基本という言葉が出てきていますけれど、通常今まで語られてきた基礎基本とは違っているのではないかと、思っています。すべての子どもに共通的な部分として捉える視点は非常に少ないわけです。A君の基礎基本、B君の基礎基本ということで、この基礎基本というのは子どもそれぞれだと、非常によくできる子は、大きな基礎基本がいるけれども、そうじゃない子は小さい基礎基本でかまわないという見方で、非常に相対化して捉えている。このことが、先ほど物理的な問題としてあげましたけれども、教科の授業時数の削減、という問題と結びついていますので、私は、総合というものを学習の中に取り上げていくのであれば、基礎的な学力の問題を位置付けない状態で、ただ単に体験をさせればいいと、経験をさせればいいという形で走っていく事については、やはり問題が起こってくるのではないかなと思っています。高校はこれからですけれども、すでに小学校で行われている、研究開発校で、まさに基礎教科が解体的な状態になっている所が現れているわけです。学校で基礎的な教科の学習をほとんどやらない、どうしているかという塾に行ってその力をつけている。基礎基本、基礎学力は塾でつけて学校は学芸会だという、これは異論があるか

もしれませんけれども、現実にはそういう所があるのは確かなんです。これは、親からも批判が出てきていて、軌道修正すら迫られる状況が現れている。それを考えましたときに、私達は、私は、総合の有効性というものはあるけれども、やはりベースになる学力がないところで、ただ単に体験をしても何も伸びないということが起こるわけです。これは大学で学生達と私もフィールドワークをやっていますけれども、やはりその問題は出てくる。これは上の学年に行くほど自分たちの力で補正していく力は、ついてきていると思いますけれども、低学年は特に大きな問題として出てくると思うんです。その点で定義の問題として、言葉尻の問題としてこの2つを論じるつもりはありませんけれども、やはりその総合というものを本当に子ども達に良いものにしていこうとしたときに、教科の問題が現れてくるのではないかな、これは単に教科ベースの総合をやれば良いという意味ではありません。ちなみに今日の中教育研究協議会の午前中のテーマは、総合学習の成果を教科にどのように生かすかというテーマでしたけれども、やはり、私どもの附属に置きましても、この総合学習の中で身につけた力を、もっと教科学習の基盤に返していく。これをどうしたら良いのかというのを、やはり悩んでいる。考えている処である訳です。おそらく午前中に皆さんに見ていただいたものが、すべての答え今の段階で100%の答えであるわけじゃなくて、一つの方向として考えていると見て良い。教科の中での学力補償の問題をやはり考えなきゃいけないし。この問題は、教科課程の見直しということを考えざる終えないだろうと思うわけです。現状の学習指導要領に書いてあることを3割削減等と言っておりますけれど、ほんとに3割減ったかあやしいと私は思うのですけれども、いづれにしても、学習指導要領に書いてあることを全部そのまま教えるという事をやったら、これだけで終わってしまうわけです。だから、それぞれの教科の中で本当に子ども達にどういう力を徹底しなければいけないかという視点で、教科過程自身を考え直すという事をやらなければ、とてもじゃないですけど教科学習以外の時間なんていうのは、できようもないわけです。だから、総合学習をやるということは、今まで通りの教科のあり方ではなくて、教科過程自身の見直しという問題が関わってくるし、教科の学力を不問に付すという問題ではまったくないと、その点で2つ目の柱というものは、おそらく大東学園さんにおいてもそうですし、名古屋大学においてもそうですし、筑波大学坂戸高校においても少なからずこの問題はあるのではないかな。というふうに思います。3つ目の問題なんですけれども、それは、このシンポジウムが高等学校が対象であるということ

で、高等学校における総合性の特質と可能性のという問題です。一つは先程触れましたように、総合・総合と言うけれども、教科をくつつければ総合なのか、おそらくそれも一つの答えかもしれないけれども、そういうことではないだろうと思うんです。総合という視点自体私は、まったく否定するつもりはありません。意味ある総合とそうでないものがある可能性があるだろう。だとしたら、意味ある総合であるためには一体どういう点を考える必要があるのだろうかということとは、これは、小中高通して大前提の問題なんです、考えてみる必要があることではないか。特に高校で取り組まれる総合学習の独自性というものは何なんだろう。小学校段階で、あるいは中学校段階でやられている総合は、その発達段階に応じた中での意味を持っているんだと思うんです。特に高校の中に位置付けられる総合というものが持つ独自の意味合いというものを考える必要があるのではないか。これはかなり実践的な問題に関わりますけれども、現実的には進学との問題がすぐに問われる。しかしそれは、直ちに受験対応の偏差値教育なのかということになっていくんじゃないだろうか。少し報告がありましたけれども、名古屋大学の附属の場合は、広い意味での進路選択の教育〈自分の人生を自覚的に選択する〉という問題として、従来の言葉で言えば、完成教育に達するわけですから、高校から出て行く子ども達が自分達の進路を選択していく・人生を選択していくということがあり、それに向けたテーマ設定があって、それなりの意味を持っているのではないかと今考えられるわけですが、いずれにしても、高等学校段階の総合というものは、おそらく、小中との違いというものがあるのではないか。これをどういうふうに、現実段階で捉えられているのかということを改めてお話をいただければというふうの思っております。最後の4つ目なんです、教育課程作りと総合学習の関係なんです。最初に授業作りの中に埋没しているんじゃないかという言い方をしましたけれども、2つ目の論点とも重なるんですけれども、総合学習をやるというのはそれだけを、授業だけを作るとやるという問題ではまったくない。高校教育全体の中に、総合学習を位置付けるということになってくると、当然教科課程の見直しの問題が出てくるし、その相互の関係が問題になってくる。ここで言っている教育課程というのは、多くの場合高校では、教育課程の論議をするというと、何学年でどの教科に何単位というふうに、教育課程表で議論される場合が多いと思うんですけれども、これは教育課程論議のほんとうに入り口にしか過ぎないと思う。教科教科外を通して子ども達の人格の完成に向けてですね、学校全体でどういう教育活動の全体計画を持っていく

のかこれが教育課程論議の最も基本だと思うんです。今子ども達が傷ついているのは、学力だけではけしてないと思う。人間的な自立自体が問われる、深刻な事態があるわけで受験勉強さえできれば何とかかなるだろうという状態ではまったくない。この子ども達の状況に対して当然学力の問題も大切ですが、同時にそれが人間的な自立に向けて有効に働くようにするためには、どんな教科外活動が必要なのか、教科の活動が必要なのかという見直しは、やはり、大きな問題として問われている。と思う。この問題を今まで通りの状態ではおいて、何か新しい授業を一つやってみようかと言うだけではやはりすまない問題になっているだろう。私は、今回の教育改革は基本的には労働力政策に非常に強く規定された改革だと思っておりますので、そんなに肯定的な評価はしていません。ただ、唯一各学校で教育課程を作れ。ということを明らかにしたと言う点において、非常に意味があるだろうと思っている。圧倒的多数の7割の流動的な労働力と残り3割のエリート層という労働力配置を考えた上で、公教育の大幅な削減が考えられているというのが私の見方なんですけれども、これは様々な経済界の答申を見ていただければ分かりますし、このままの事態が推移していけばこのことが益々はっきりしてくると思います。けれども、ほとんどの子どもにとっては、やはり学力の切り下げになる可能性を持っているのではないかと考えています。この評価については、ご意見があるかも知れませんが、私はそれでも、各学校が教育課程を作るという事を、本当にやれば、どこか別の所で違うことを考えている人がいたとしても、各学校の中で子ども達の現状に答える可能性は、手掛かりはでているという、この点は非常に大事ではないかというふうに思っているわけです。だから今子ども達の問題状況、これは立場の問題ではなくて子ども達が持っている知的発達や身体的発達や或いは人格的発達で日常に抱えている課題を共有すること、どういう課題を抱えていて、その子ども達の問題に対してどのように共通の目当てを持ってあたっていくのかこの点がまさに学校に問われているし、それを議論すると言うことが教育課程を議論する、という問題ではないかと思うんです。せっかく教育基本法に人格の完成を教育の目的とするという規定があるにもかかわらず、全面的な人間の捕らえ方というものなかなかできないような状況になっている現在であればこそ、改めて私達が人間的な自立に向けて、自らの自立もかけて、学校の教育活動のデザインを根本的に考え直してみようというてんでは非常に大事な問題であると思う。ですから、学校作りと言う言葉も出ましたし、教育課程と言う言葉も出ましたけれども、それぞれの学校の総合学習の

論議の背景にあるのはやはり、共通する問題は単なる授業作りではなかったと思うんです。困難な子ども達の状況に直面しながらそれに切り込んでいく問題としてこの総合学習の課題を捉えてきた。だとしたら、その全体的な教育課程の問題。どこまでその議論が進んでいるのか。子ども達の実態に対して具体的にどれだけ変化が起こっているのか、あるいは親達から見てその学校の評価と言うものはどんなふうに変わっているのか、教職員集団がどんな風に成長しているのか、こういう形で、単に総合学習をどう作るかと言うそういうレベルだけの問題ではなくて、広く学校の学校づくりの基本設計である教育課程の問題との関係を4つ目の柱として議論できればというふうに考えております。大変大きな問題ばかりあげましたけれども、先ほど申しましたように、会場にお見えになっておられる参加者の方々からのご質問・ご意見をなるべく反映する形でシンポジストの方々に改めてこの問題を投げかけたいと思っております。急速を十分間、はさみましてその後のところでですね。先ほどの報告では言い尽くせなかった部分。この柱の中で、いくつかの点に触れていただきましたけれども、この点にもっと言及したいと言う点があるかと思しますので、まずシンポジストの先生方にその点からお話しをしていただいて、シンポジスト相互の質問や意見と言う形で議論を進められればというふうに思っています。以上です。

齊藤：どうも有り難うございました。では10分間の休憩に入ります。質問用紙もこちらの方まで寄せ下さい。

齊藤：では、後半部分の方を始めさせていただきます。後半部分はコーディネーターの植田先生にお任せしたいと思います。

植田：会場の先生方から頂いた、ご質問につきまして、担当のところ回覧をいたしました。最初に申し上げましたように、一問一答型でお答えする形になると、もう残り50分しかありませんので、なかなかまとまった議論がしぬくいかと思います。小さい問題につきましては、この後の所ででも、個別に聞いていただくとすることも出来るかもしれませんが、その点はあらかじめご容赦願いたいと思います。先ほどお話ししましたようにお一人10分以内とうことで、改めて、先程の・第1回めの発言のところでお話しし足りなかった部分やあらためて他の2校のお話しを聞かれて思い立った点もいくつかあると言うことですので、2回目の発言をお願いしたいと思います。でその後先程の質問もふまえながらシンポジスト相互での議論・質疑等を行っていききたいと思います。それでは、池上先生から願います。

生から願います。

池上：体制のことを話していなかったもので、あれですけども。私たちの学校の方では3つの必修の総合について、一応希望制でやっているんです。今30クラスあるものですから、30人があたっています。これで専任の人が60名いて42～3の人は一回は経験しています。後は講師の先生が10名ほど経験しています。この中で、教師側の話をしておきますと、私も1年目に「生と性」をやって、3年目に「女性と人権」をやったわけですけども、最初の年の「女性と人権」をするときに、次に日に授業があると眠れないんです。それなりに準備をしていくんですけど、自分の専門でもないから、これでいいのかというのがたえずある。私の場合運悪く、教科会と言うのが時間割の中に1時間、保証されている。その教科会を終えた次の時間が僕の授業なんです。そうすると前日からずっと準備してきたことが、教科会で交流し、みんなのを聞いたりするとそこで動揺しちゃうんです。

数学の授業では、全く質問もしない生徒なものですから、そういう意味では、全く新しい経験をしたのと。もう一つは、先生たちの感想は、自分たちの専門ではないのでいろんなことを、勉強するわけです。一番勉強したというのが、1年目の先生方の感想だったんです。これはもう一つ、生徒たちが自分でいろんなことをしゃべるわけですから、国語の先生や社会科の先生にしてもですね、なかなかみんながこちらが提起したことに対して、特に1年生の「生と性」なんかは、1クラスを二つに分けていますから、今では15人から16人のクラスでやっているんです。そうすると何回も話す機会があるものですから、自分から問題提起したことに対して、みんながこんなことを考えているのかということがよく分かる授業というのは、そういう意味では初めて体験したようなことなんです。そういう意味では、このことが教師の方にとって見ては、自分の専門の授業の中でこういうことできないかなという、問題意識を持つんです。すぐ簡単にはできないんですけども、やっぱし、なんとかしたいなという気持ちをもってきた。それから、この授業では生徒の話し合いが中心ですから、こちらの方でごちゃごちゃと話していたりしたときに、「うるさい」と言ってしまうと、シーンとしてしまうと逆に授業が続かなくなってしまう。だから、教師の方が例えば自分の授業では、わりとピッシッとしてから授業する先生も、この授業ではそれをやっちゃうと続かないものですから、人格的に分裂するような授業をする。こちらで騒いでいても、それなりに授業に入っていく。というような形……。生徒から見ると今日は何だ。という面も生じる。でも

その中で、生徒のいい面・・騒いでいるんだけど。ヒュッと良いことを言う子もいるんです。それは、うちの生徒。他の生徒もそうでしょうけども、なんか一つの話題になったらずーっと発展していくわけです。授業の方はそっちの方にいっているんですが、ヒュッと戻って、プュッと発言したりすることが良かったりして、そうするとしゃべっていることも別に悪いことではないという認識にもなってきた、かなり生徒感を変えてきた。それから、もう一つは、授業をやっているこの総合の授業・・最初の「生と性」は2年間準備をしたんです。やっぱり授業だということがあるから、テストも評定もないんだというんだけど、やっぱり一応授業案みたいなものをつくらなければいけないんじゃないかと、教師ですから・・大まかに作ったわけです。

男女の性機能やって、妊娠や中絶なんかもやったりしてそれから性の商品化、1年目の時は、援助交際・テレクラなんかをワイワイやったところなんですけども。そんな問題やって愛と性みたいなところで、終わろうと作ったんです。作ったんですけど、これを子どもたちの色々な意見だとか疑問に答えるような授業をしようというんで、コマーシャルですから最初の授業というわけです。私の授業なんか、そしたら生徒が。いろんなことを言ってくれといったら。「男と女はどうしてできたの?」「セックスはどうして必要なのだとか、根本的な質問があるんです。教師としてはそのことは置いて、取り合えず人間の性機能入って、サーッといきたいというのが意思統一だったんですが、生徒の意見を聞きながら授業やると言った手前ですね、そういなくて・・・私も理科系の人間ですからそうすると、優性生殖・無性生殖から性が始まった辺までやらないと、答えなきゃだめだ・・。

私なんかその時のチームの責任者でしたが、自分から約束破ってしまい、遅れてしまう訳です。結果的には、この授業は・・・その後確認したわけですけども、いくら決めていても自分の個性でやることと、生徒とのやりとりがありますからそれを途中で切るわけにはいかないので、本当に大筋は決めたんですが、12クラスみんな違う授業をやるようになってきた。もう一つこの中で2学期に「性の商品化」でテレクラの問題や援助交際の問題を扱った。この時に、それまで細かく授業の中で何かを教える普通の授業とは違うんだ。と言ったものの、何を教えるのかと言う問題になり、何か参考になるものがあるだろうということのになったが。性的自己決定権みたいなことがこの1年を通して、一定の目標になってくれたらと言う思いがあったんです。けども、この性の商品化のところで、テレクラ問題やったときに、子どもたちが壁にぶつかったんで

す。話し合っていると、「人は人。私じゃない。」「そんなのしょうがない」と言う壁にぶつかった。この時に教師が焦ったんです。これで、教師が「こうなんだ」と言ってしまったら、この総合の授業は終わってしまうんです。それで、僕らはここで躊躇して授業も停滞したんです。私たちは、そこで、性風俗の実体を見に行こうと、夜の歌舞伎町へ何人か出かけて行って、実体見に行ったりですとか、うちの生徒で、テレクラ何かで危ない目をしている子もいるんです。最初は、1時間1000円座っていればいいというアルバイトだったのが、だんだんそのうちに、電話をとった時間の1時間が1000円に変わり。そのうちだんだん慣れてくると、積極的に誘えとか怖いお兄さんが出てきて、逃げて帰ってきたとかいう話が出てきたりした。この問題をテレクラの問題で取材していく中で、結局、女の子の問題が多くピックアップされた。これは、最近の性風俗のヒット商品なんです。これは若い男の子の参加率はもっと多いんです。このことも分かってきました。電話の料金は6秒10円です、男の子の方は、女の子はただです。これを1時間使ったらすごい電話代になる。なのに生徒は1000円しかもらえない、その差はなんだ、とかなると、このような問題から管理売春の形を明らかにして進めていった。この時にしばらく、この授業で、なんか結論を押しつけたらだめだという方向を定着させた。これはこの後の平和の授業や女性と人権についても、討論だからやるけれども、教師が「これは押しつける授業ではないんだ」と言うことを発見したこと。結構自分で自由にできる授業と言う意味では、いろんな試みができるということでは心地よい経験を、教師の方もした。ということです。

服部：さすがに東京の真ん中の学校の先生の話はおもしろいですが、私はそんなにおもしろい話はありません。私の方が補足することと言えば、これをやっていく中で、教員のあり方はかなり変わっていったということ。特に私の学校は、前が専門学科でしたから、普通高校となんかとも違って学科の縦割りの学校のあり方と言うのが非常に強くて、他の学科とどちらかと言えば対立関係にあるような学校から、総合学科を作っていく。産業社会と人間を作っていくという過程で非常に従来の専門学科の縦割りのあり方が変わっていった、教員が関わり合う・・関わり合わなければ学校づくりができないという所で教師が変わっていった。と言うのが大きなこととしてありました。

私はこの学校に非常に長くいるものですから、昔のあり方が信じられないぐらいに今は全く教員のあり方が一変した。と言うことが言えます。生徒がどう変わっ

たかと聞かれるとなかなか難しいところがあるのですが、教員は明らかに総合化されたとは言えます。それから、教科・教科教育とこの総合の時間との兼ね合いということがコーディネーターの先生から話されていましたが。そういう面では総合学科のシステムというのは、時間の取り合いというのはないんです。必修科目を最低に押さえてそれは指導要領に有るとおりという形でおさえて。後は選択科目ですから、「自由に選択しなさい・開設しなさい。ただ生徒が取るかどうかはわかりませんが」というものです。いわゆる普通高校なんかで時間の取り合いをするというような状態は、今、私の学校も教育課程検討委員会で、新しい教育課程を検討しているんですが、そういう面は総合学科というのは、いいです、今までの学校と違って、そういう時間の取り合いをしなくて済むということがあります。それから教科と総合との関係ということかというと、今私の学校ではこういうことが問題となっています。つまり、専門教科；農業とか工業とか家庭、商業というのがうちには専門教科としてあるんですが、この専門教科のあり方が総合学科にすることによって、根本的に変わってくる。従来の学科制の専門教科と全く違って来る。つまり、専門学科では3年間かけて専門教育を系統的に積み上げていく、カリキュラムが農業科とか機械科・商業科とかいうカリキュラムが3年間かけて系統的に積み上げられている。ところが総合学科では2年と3年、2年間で・1年間少なくなるし、さらに生徒は必ずしも教師が期待するような形では選択しない。教師側からすれば、「これを取って、これをとってほしい」というのがあるわけですが。生徒は必ずしもその通りには取らない。きわめてユニークなできるだけ人と違ったオリジナルな取り方をしようとするから、教師が期待しているような系統学習ができなくなってくるという面があります。それは専門教科の或いは専門学科の人たちからしてみれば、だから総合学科は駄目なんだという事になるわけですが。私どもは生徒側に立ってば、生徒がそういうふうに取りたいのであれば、それで良いんじゃないかということやっていくんですが。でも、本校の専門教科の先生たちも内心はその辺不満に思っています。それで、今本校で取り組みと言っていることは、専門教科を総合化していく。つまり、工業の先生には「工業高校の機械科と同じ事をやろうとしちゃ駄目だ。」と。つまり、工業高校の機械科ではできない工業教育を総合学科でやろうと。例えばそれは、本校には農場があって、農業科があって、つまり環境の問題を農業の方から農場使ってどういう授業をつやるか。そこに工業がどう関わって環境の問題を工業の中に取りれていくか。・そういうことを言っていて、

今やっと始まってきたのは、家庭科の調理の先生が「農場で野菜を作りたい」と、その野菜を使って調理実習に使っていききたいと。そこには、農業の先生に教わって野菜作りを調理を選択している生徒が、農場へ行って野菜作りから始めるというようなところでやっと農業科と家庭科が近寄りつつあつとか。あるいは、工業の先生がプログラミングの授業で、障害者とか老人の介護用のベットとか介護用のエレベーターとか、そういうものをプログラミングする・工業の時間にプログラミングする、つまり福祉という観点と工業という観点を一緒にしていく。まだまだ実際に説明できるものは少ないですけど、これから総合学科の専門教育というのは総合的な視点の中で、専門学科とは違った専門教育を作っていく。それは、総合化と言うところで新しい専門教育を作っていくんだという事で今取り組んでいます。少し普通科の先生とは違った話になってしまいました。もう一つ申し上げておきますと、課題研究を新しいカリキュラムでは総合学習の時間に入れようと先程申しましたが、この課題研究もですね、やってくる中で、・課題研究というのはもともと専門学科では、ずっと前からやっていたわけです。本校も総合学科にする前は、専門学科だったので、専門教科の先生は課題研究をやっていた。総合学科にするときに専門学科の課題研究と総合学科の課題研究は、どちらがうかということを議論しました。専門学科の課題研究は、教師主導型の課題研究、教師が内の実習施設を使って内の教員スタッフで、こういうことが・こういうテーマで生徒を募集する、生徒にいくつか課題があってそれを選択させるわけです。ある程度指導のプログラムはできていて、その中で研究していけばある程度こういうレベルに到達していく。そういうものがあってそれを課題研究としていた。総合学科では、それをやめよう。もちろんガイダンスのところで、こういうテーマの例がありますとか、テーマを例示するのはやっていますが、あくまで学校が設定したテーマに生徒を当てはめるのではなくて、生徒が自分で作り出した課題；テーマそれに向かって生徒に取り組ませる。総合学科では生徒主体型の課題研究。160人いれば160通りのテーマがあって、つまり教師がそれを指導できるか、指導できないとかと言うものはいっさい抜きにして、生徒がやりたいと言うものに取り組ませる。ただし、生徒がやりたいというものをそのままにしておいたのでは生徒の設定するテーマは膨大なもので、大学に先生だってできないようなものも出てくるので、「これは高校生では無理だよ」とか何がやりたいか分からないようなテーマが出てくるものですから、「1年間このテーマじゃ、すぐ終わってしまうよ。こんな事調べればすぐ分っちゃうよ」とい

う指導は十分にします。そこが一番大事なところで、そこで1年間取り組めるようなテーマにしてやるというのに、教師が積極的に関わって指導していきますけれど、後は教師の指導できるものでやらせるというものではなくて、生徒が自ら取り組んで行くという所を主体にしてやらせていく。そこを専門学科でやっていた課題研究とは違った形でやろうと。課題研究発表会というのをやるわけですが、最初の内に出てくる教員の不満というのは、専門学科の時の方がレベルの高い研究ができた。総合学科じゃ教えちゃいかんというからほっとくこの程度しかできないと。・・・教員というのは教えたがりですから、俺たちに教えさせてくれればもっとここまでやってやるのに、教えちゃいかんというからこのぐらいしかできないという不満が出てきて、最近もう少し教えようかと、いうようになりました。あまり成果がレベルが低いとなると教員の方もエネルギーが湧いてこないところもあって、それではもう少し成果も考えようと・・・最初の内は成果を求めないで生徒が主体的に取り組むというところで考えたのですが、だんだんそれも今年で4年目に向かえるので少しずつ定着してきて、それでは、もう少し発表の仕方だとか、最後の作品として仕上げるところの指導をしようとか、そういうところに移っていますけれども、総合学科の課題研究というのはあくまで生徒主体の取り組み方を中心にやっていこうということでやっています。

矢木：今、池上先生や服部先生が言われたことと重なる所もあると思いますけれど、私たちの意識変革というんですか、私自身の意識変革といっても良いんですが。最初総合人間科に取り組む時に、私は数学なんですけれども、数学というと現代的課題というものに当てはまるには最も遠い教科ではないかなという・・・いろんなアンケートなんかを見ても数学というのは、最も遠い教科といわれているんですが。それで、果たして自分が生命環境とかそういうテーマに当たった時にやれるのだろうか、そういう気持ちで非常に不安でした。ですが、学校づくりの一貫というような形でこれをとらえるならば、教師が変わらなければ生徒も変わらない。学校が変わらない。ということで、教師はなんか変わっていかねばいけないと。そこで、コーディネーターの植田先生などにもご指導頂いたんですけれども、まずは、学び方を学ぶという、そこからスタートすればいいのではないかとという助言を頂いた。教師が、専門的なところで教えたがり・・・教師が生徒に何かを与えなければいけないという意識が強かったわけなんですけれども、そうではなくて一緒に学ばいいのではないかと。環境問題を扱うにしても私自身詳しく

はないんですけれども、それでもそれを担当するというところで、新聞とかそういう情報に対して関係するところを注意深く見るようになった。そういうようなことで教師も一緒に学んでいけばいいのではないかと思います。ちょうど2年前に研究開発の3年目の発表の時にこういうシンポジウムで生徒も含めた形で行いましたけれども。その中の生徒の発言では、その生徒は総合人間科の中で本当に生き生きしていた。その学年を担当していた先生が言うには、はじめの時間に先生がレクチャーしようという形で授業に望んだけれども、「先生、そんなのいらない、レクチャーなんていらぬ。先生も一緒に学んで、アドバイザーで良いんだ。いや、アドバイザーじゃなくてオブザーバーでいいんだ。」とその生徒が発言したそうです。そういうようなことで一緒に学べば良いんだ、教師としては学び方を多少見ていけばよい。いわゆる環境問題についてレクチャーするというものではなくて、環境問題をどういう観点で迫っていったらいいのだろうか、一緒に考えて、その迫り方のアドバイスというかそういう形でよいのではないかと。そういうことで、多少気が楽になって、この会場にもお見えになっている私の先輩の教師に習って、人類と平和という選択教科を担当することになって、その授業では、一緒にその授業を作っていこうということで、話し合いを中心にした授業で、少しずつ成果が上がってきたのではないかと感じています。このように教えるというよりも、一緒に学ぶ、共に学ぶ。そうすれば教師が変われば、生徒も変わってくる。そんな所があるのではないかと。生徒の考えによるいろいろなテーマを設定してくる。高1では120名が個人テーマを決めますので、120通りのテーマが設定されるわけですが、それぞれのテーマに従って、どう解決していくか。・・・服部先生の方も先程言われましたが、私たちの方はちょうどこの学校が大学の中にあるということで、大学の研究者；植田先生をはじめ教育学部の先生方または、理学部工学部の先生方を利用しようと、スクールボランティア制度を設けて、大学の先生や保護者の方に協力していただいて生徒の要求にも応えていこうとしています。教科論から見たという観点ではなく、学校づくりの観点を重視している延長線上に、学校行事との関係を考えました。この点で見ると、たとえば研究旅行とかそのような行事で、そのための準備にどの学校も相当の多くの事前学習・事後学習という形で取り組んでおられるのではないかと考えますが、そのような時間的な保証を生徒に与えてやるのか、だけでも、それを行ったから総合学習の時間に変えてしまうというのは、まずいのではないかと。体験学習などもこの中に含まれていますけれども。介護の問題でどこかの老人ホームへ

行って、介護を体験した。それで、総合的学習が済んだかといっは、まずい。それはどこかのカルチャースクール的な講座を設ければそれで済むかと言ったらそうではないのではないかという感じがします。

私たちは学校行事とリンクさせて総合人間科をやってきましたけれど、当初は研究旅行にいかにか時間的保証を与えて、うまく回していくかということでやりましたが。最終的にはそこで終わらないで、総合的な学習を位置づける中で、当然学校行事そのものが性格が変わってくるのではないかという気がします。学校祭や体育祭のなかでも、多少お祭りのことは有りますけれど。総合人間科ということに絡めて、いわゆる縦割り、生き方チームだとか平和チームだとかを作って、中学生と合同で縦割りでチームを組んだりしています。そういう中で先輩、後輩との関係や人間関係などまた違った見方もできるとか、行事そのものも変わってくる事もあります。研究旅行などでも、ただ単なる観光・・・私たちの所は観光旅行ではありませんけども、・・・私たちの所も、沖縄に行くんですけども。その沖縄へ行くために、事前学習相当積むわけです。ただ単に沖縄でなにをやるかだけの事前学習、事後学習ではなくて、それから平和というものを考える。という4月から沖縄に絡めた形で、平和とはまたは沖縄の基地の問題だとか。産業の問題だとかいろいろな観点から、ディベートを行ったりだとか、そんな形で取り組んできました。実際に沖縄で研究活動をするにしても、中身も今までとは違った形の取り組みが行われるという形で、行事そのものも性格が変わってくる。そんなところがあるのではないかと、思っております。

もう一つ今日公開授業で、「総合学習の成果を教科にがどのように生かすか」ということで、クロスカリキュラムの試み；例えば高1で言えば「保健・倫理」「生物・英語」「国語数学」という形で組みましたけれど。これらの組み合わせは、いわゆるそれぞれの教科の必然的に保健と倫理が組み合わせさったとか、英語・生物が組み合わせさったということではありません。一番最初に言いましたけれども、総合人間科は学年団で取り組むということで担任、副担任がたまたまあるクラスは、例えば今日で言えば高1 Aは保健倫理であった。ということで、教科の中でどう扱えるかという形で進んできたわけです。ですから今後の課題というようにところで言えば、これが、普通の授業の中で、それこそ総合学習の成果がいわゆる普通の教科の中でどう生かされていくか、その辺りを考えていかないといけないと思います。取りあえず今回は必然的なものではなくて、少なくともいろんな教科と組み合わせることで取り組むことができた。今度はもっと発展的に、本当に必然的に、仮に保健と数学がどうしても結びつ

けなければならないというならば結びつけてやってみるだろうし。どんな教科でも結びつけることができるんだと、そういうような事で今回、十分ではなかったかとは思いますが、今後の課題として考えております。

植田；2回目の発言を受けて先生方それぞれに相互にお伺いしたいこととか有るんじゃないかと思うのですが。池上先生いかがですか。

池上；先程言ったんですけど、違う教科を持ってですね、先生達が問題意識が変わっているところが有ると思うんです。その辺のところがどうなんかお伺いしたい。

服部；教員が変わったと言ったところは、まだ、そういう、生徒に対するいわば生徒との関わりの方よりも、教員同士の・・・専門学科の時代はつまり一匹狼的な先生でも通用したが、総合学科を作ってくる過程では、自分の教科とか分掌とか学科とかあらゆる垣根を取り払って人と関わらなければならない。そうすると調整力とか協調性とかが要求されてきて、つまり、学校のリーダーシップを取っていく人間の質が非常に変わっていった。つまり、それは生徒との関わりの方にも反映していった、生徒そのもののあり方も、専門学科の時は同じ学校の中にも生徒が、農業科とか機械科とかいう学科の枠にとらわれていて、横のつながりというものが非常に薄かった。ところが、総合学科のシステムになっていくと生徒そのものも混然としていく。そういう中で生徒は様々な刺激を受けて活性化していくという面があって、とにかく今の状況というのが人間関係がすべての面に開かれていっている学校づくりになっている。ということだと思います。

矢木；質問に答えるというより、逆に池上先生に質問したいんですけど、よろしいでしょうか。・・・大東学園では、いわゆる教科指導の問題・困難さから総合的学習が始まったというように聴きましたけれども。その後総合学習でジェンダーとかそういう問題を取り組んでこられて、その後いわゆる既存教科の指導がどのように変わってきたかそのところをお聞かせ願えればと思います。

池上；96年からカリキュラムは、全体を変えて総合が一部だったんです。その中で今日の記念講演であったように、カリキュラムでも土曜日が無くなるし、必修は選択も入れたりするから18時間ぐらなくなったんです。だから必修部分をどうするかということで、必修は基本的なことをやって、その中で生徒達に興味を

持たせて選択などに移行できるようにしようというようにも合わせて決めました。このことがどうだったかについて今年4月から1年間必修教科の見直しも各教科でやったんですけども、その部分が遅れているんです。けれども、その中で1つ、1年生の現代国語なんかは1年間通して変わったんです。これは、教科書つかわなくなって、1年の1学期は、短い文章で中身が合ったり討論できたりする文章を毎回、や1/2時間ごとに与えて、それで話し合ったり。意見を書いたり返したりとか、これを1学期通してやって、2学期で少年Hを呼んで、2学期の終わりから自分史などを書いたりして、3学期に自分で・・・段取りがあるんですけども小説を書こうということで、5枚くらいのももの・・・生徒はまとまらなくて20枚30枚になちゃったりするんですけども。そういうような流れに変わってきて、これは子ども達はずーとおもしろいと思ってきている部分があるんです。私の数学なんかも、ずーと基礎ばかりやっていて、うちの生徒は中学時代から定義あってずーとやて一番おもしろい所行くまでにわからなくなっちゃっている子が圧倒的に多いんです。その辺の所の考え方を変えないといけないのではないかとということで、今は実物のところをぶつけていく授業から初めて・・・その最初の所はやってあげて次から格闘しよう・・・1年生で言えば、三角比なんかは圧倒的に測量の問題から、実際に自分たちで道具を作って、自分たちで問題を作ったりして。確率の問題なんかも、実験部分と計算部分で分かれたんですけども、計算部分も実験を通してしまふ。実験を検証する意味で計算が入ってくるような授業にしようとか。2年生で今積分なんかをやっているんですけども、教科書通りに行けば $Y=X^2$ を100等分させていくんですけども、これではなくて、実際の所からやろうと言うことで、難しいかと思ったんですけども、空気の重さ、1センチ平方にすると1.033ミリグラムになるんですけども。これを理科年表からデータを持ってきて・・・たして2で割ればいいんですけども、これは計算の所は電卓を使ってズーと計算してみたら。

1. 037くらいまでになるんです。ほぼ近いところを正解するんです。これを2時間ぐらいかけてやるんですが、やった感じになったりすると、それだけ有れば良いんじゃないかというような感じに数学なんかは変わってきている。

植田：色々ご質問いただいた中に、子ども達自信の広い意味での進路自体がどのように変わっていったのかということがあったんです。それはそれぞれのご発言の中で少しづつ触れられていたんですけど、もう少

し3校共にですね、こういう教育内容の変化の中で子ども達の進路や進路に対する意識の変化という問題についてもしお話し足りないところが有れば追加をしていただきたいのと。親の学校に対する評価、まなごしの問題についても触れていただければと思うのですが、いかがでしょうか。

池上：質問にもあったんですが、親たちはどうかというと、うちの場合総合の1年生の生と性というのは、ものすごく親にも感心があるんです。最近これをやりだして、今年の1年生なんかも、新入生の何で入ってきたのかという質問に、昔は、学校の雰囲気がいいとか説明会の対応した先生が良いとかということがあったんですが、教科のことを触れていたのは、昔は英語数学がダブル授業という2つに分けて演習の時間など細かく面倒見ていた訳なんです。こういうところで力が付くのでないかと思っていた生徒が一番多かったんですが。去年から総合の授業を受けてみたいと言うものが2割近く出てきました。これは親なんかも、性の授業を1年生でやっているんですね、家に帰って子ども達はそのプリントを持って行って、こんな授業やったんだと親子で話をすると言うものが結構多いんです。子ども達の方が、性を教えてる先生はHな先生と言われて名前呼ばれないんです。そういうことで親の中にも一定の指示があると思います。それから生徒を変えたのが、もう一つ。生徒は教科の授業中ではなかなかものを言わないんです。数学なんかまわして、間違っているなどと言われたら、教師の方が強いんです。しかし、この総合をやりだして1期生が2年目の時に去年一昨年、98年の2月に本校もできるだけ生徒を自立させようと、生徒会と学校の協議会みたいなものを作って、生徒の要求が出て、トイレが汚いとか玄関きれいにしろとか、金の問題もあるんですが。そのような要求に応えてきたんです。そのときの2年生から出てきた要求に「教師のレベルが低い」と言うものが出た。生徒会の担当者は、あたふたしてしまい、こんな問題取り上げて良いのかということになったが、生徒の意見の聴くという方針からするとおかしいのではということになり、もう一度聴いてみようと言うことになった。そして、具体的に話し合ってもらったら、2つあって、1つは、気分感情で教師はものを言うな。これは当たっていたんです。もう一つは、もっと予習してくれというのがあった。これは何故かということ。もっと詳しく聴いたら、この総合の授業といのは、テキストも何もないから、教師体当たりであの時のビデオだとか、この辺の新聞とか持ってきてですね体当たりで問題提起するわけで、同じ社会科の教師が現代社会で、2年ぐらい前の新聞記事を使ってやっている事



への批判で、ここをつつかれたんです。そういう面でも子ども達はものを言いだした。たかだか1時間の授業でしたが、ここが大きなきっかけでした。ここに教師も載っかっていけば、変わっていけば良くなるかなと思ったりしてるんですけど。これは先程の進路の話もありますけれど、・ ・ ・大学全体が入りやすくなっている傾向はあるんですが、この一期生が、去年の卒業生が、それまでは、なかなかうちの生徒では短大まで行っても、このテーマだったら4年生まで言ったらと勧めても、私はいいですと答えるだけで、現役で7〜8名程度がせいぜいだったんですけど、去年の3年生は、総合の1期生なんです、23人4年生大学へ行ったんです。これは何が違ったかという、総合しか違ってないんです。その中で結構ものを言ったり、自分の主体性でやっていた。そういう意味では、4年間やってみてうちなんかの学校では確かに英語力がどうだとか言われるとですね。無いかも分からないけど、その道はその道でいいのではないかと思います。

服部：どうもちょっと、この席にいて落ち着かないのは、総合学習をやったからこう変わったという状況ではなくて、私の話というのは総合学科の中で学校が変わったという話なんで、どうも今日の話からなかなかしっくりはまらないと言うのと、私が最近授業をやったいものですから、生徒が直接どう変わったかという話になると、なかなか対応ができないという面で、少し名古屋大学、人選を間違えたなというふうに思っております。しかし、進路の面では、・ ・ ・これもですね総合と進路がどう結びついているかという形では、ちょっと難しいのは、今、総合学科に変えることで学校へ入ってくる生徒の層そのものが変わってるんです。要するに、教育の成果でこう変わったというよりは、総合学科という新しいシステムが地域に受け入れられていって、入学してくる生徒の層が変わってきている。それで進路の問題というのが、職業教育の学校だと言うことがあっても大学進学したいという生徒が非常に増えて来ていて、学校としては非常に矛盾に突き当たっている。職業教育を総合的に施すだという総合学科を展開していながら、入ってくる生徒がだんだん大学進学思考になってきて。最近本校では、大学の入試も変わっていく、いわゆるAO入試だとか、AC入試とかいうようにですね、高校時代何をやったのかということを評価してくれるような入試がこれから拡大していくと、実際今年本校から初めて筑波大学の工学システム学類というのにAC入試で合格したんですが、それは口頭試問で簡単な普通科高校の生徒だったから最初のうちに教わるような、簡単な物理の問題を出されたけど、それには答えられなかった。何がなん

だか分からなかった。だけど、課題研究で作った模型を持って行ってそれを説明したと、そのことが評価されたとみえて合格した。こういうふうに高校時代何を勉強してきたかということを見られるような大学がこれから増えていくことによって、職業教育を一生懸命やってその発展としてさらに大学行ってそのことを極めたいという大学進学の道というのがこれから拡大されていくのではないかと。本校ではその点を1つの目標として、専門教育と大学進学を結びつけていく。私は職業教育の進学校を目指すと学校の中で言っているんですが。そういう道が1つあり方として出てきていること。だけど、そういういながら、これまでも推薦入試で筑波大学に何人か生徒が行っているんですが、筑波大学の方から校長を通じて、「坂戸高校の生徒を受け入れるのはいいんだけど、やっぱり英語の力が弱いから、もう少し英語を何とかしろ」と大学の方から言われたりするんです。それで、こういう教育をやっている反面、基礎学力の方は足りないという部分もあって、その辺矛盾となってきた、来年から本校も、多少夏休みとか使って、いわゆる英数国の基礎学力の充実を図る補習を始めようかと。職業教育の学校でありながら英数国の補習を始めるということを計画しているというような問題もあって。なかなか難しい問題です。

矢木：進路に関しましては先程申しましたとおりで、保護者の方についてですけれども、本校では4月の最初の総合人間科の授業を保護者に授業参観してもらいます。実際に保護者に見ていただいて、保護者の方に総合人間科の授業を理解していただく、協力をお願いしています。その後特に中1では、出会いから学ぶと言うことで、身近な自分の両親とか小学校の恩師とか塾の先生とか、興味を示した方からの出会いから学ぶというところでやっていますけれども。その中に保護者の方で自分の子どもと真剣に自分のこと自分の生き方そのものを話したことがなかったのも、非常にいい機会であったと、評価していただいたこともあります。実際に子どもを自分の職場に子どもがお父さんの職場に訪れてそこでフィールドワークを行った。それなりに評価いただいたり。現実には高校の方になっていきますと、授業参観にしてもなかなか集まりが悪く、今、表だってこんなことやっていいのか、これで学力十分つくのかというような点について、以前は補習とかどんどんやってほしいという意見が出てきていたんですが。最近は、そういう声は表だってあがってきてはいませんが、それでも、どこかで、学力の方をもっとというような・ ・ ・特に3年生の親の中ではそういう話題が聞こえたりもしました。少なくとも教科の基礎基本の押さえはしっかりやらなければいけな

いと考えますが、総合学習についての取り組み、それは、保護者に十分に理解していただくそういう機会を持つのは非常に大事なことではないかと思います。

植田；もう時間が来てしまいました。今ご報告があったそれぞれの学校が小規模校だからできるんじゃないか、というようなご質問もありました。私も見ている限りで、特に研究指定をやっている所は、小学校の場合だとかなり教員加配がされていたり、特殊な施設の条件があったり。つまり、学校が持っている基本的な条件がかなり違うところで、あるおもしろい実践ができていく場合が多いんです。根拠になっている基盤の部分も含めてこの実践例を見ていく必要があるということはその通りではないかと思います。ただそれは、大規模校ではできないということなのかどうかと言うと、またそれは、別のやり方があるのかもしれない。この点もまた学校ごとの答えに任されている問題ではないかと思います。今問題になっていることは、子ども達が抱えている学力含めたいろんな困難に対してどういう答えを学校で出していくかということが、問われている。私はそれは教育課程の問題であろうと思うんです、教科課程だけじゃなくって教科外活動も含めて子ども達の現状にどういうふうに切り込んでいく必要があるのか。それを考えることが一番基本ではないかその中に総合学習が噛み込む可能性を持っているというふうに思うんです。可能性として持っている。しかし子どもの現状と関わらないところで、モデルだけ持ってきてやろうとしてもこれは失敗する場合が多いんじゃないか」と思います。私個人の経験でいえば、大学生がどこで変わるかに行ったときに、現実の教育、本物にぶつかるということがないとなかなか自分たちの学問の問題として捕らえられないだなあということを私自身は時間は実感をしているんです。うちの高校生は沖縄に行って、私の研究室は北海道の宗谷へ行くという南と北の端に分かれているんですが、フィールドワークの中で子ども達や学生達が変わっていくということがある。その点で総合という視点自体が持っている可能性は丸ごと否定する必要はないんじゃないか。というふうに思っています。

ただ一番大事な問題は、何度も申し上げましたけれども、いま、恐らくご報告なされた学校それぞれ違う条件の中ではあるけれども、子ども達の現実に対して向かい合う中で、それぞれの答えを出しておられるということが一番大事な点なのではないのかなと思います。ということは問題の建て方や課題の探し方自体を相互に研究して、自分の答え・・・学校の中で一番いい答え出していくというこの点を考える必要があるのではないかということ、今日のご報告をききなが

ら、改めて感じました。

以上で高校のシンポジウムを終了させていただきます。